

一菊

りはといふ事もあれど、お前は藝者ぢやないか、同じ家中の御れん中に出るさへあるに、是みよがしにこなすとは、如何に源五兵衛様が今引込だというて、あんまりな仕方だそれぢやアすまないくく、ト墨をたき立て思入、エ、なんぢやいの、こなさんまでも同じやうに、是いなア是には段々様子のある事、そりやおまへも合點がゆくま

一宗

い、ト宗十郎にかけて、二かいを見て、サアがつてんしてのさ○のいて下さんせ、わたしやふつ、り思ひ切つて居るわいなア、ト宗十郎こなし有てそりやどうなりと、そちが心まかせに致して呉うわさ、又身共がたのんだ、○イヤサ、其方がたのんで斯う成た源五

一菊

兵衛、身にも命にも替へぬ大切な、○イヤ大切な金銀をうち込で、金の威光でくどきおとす事はなんぼもある、身共は又、其金銀が拂底故、小万大切な、な、サア、金銀がな

一龍

いゆゑに、そちに○そちにまようて居る、な、それを首尾よう、イヤ三五兵衛殿と、仲よう添遂げなりとどうなりと、アイ、そりやおまへのをしへ○お前にをしへられないでもわたじや三五兵衛さんに、ト兩方へかけて、おまへに、トこなし、龍藏思入あつて、

一宗

コリヤもう、釋迦でもこたへられぬわえ、ト立かゝるを、宗十郎一寸とめて、ハテ扱、其様に立さわがいで、いふ事はいはれる、マ、

五八切

一菊一宗一仁一宗一仁

しづまつて居い、大事ないわい、
源五兵衛どの、お腹が立なら存分く、
三五兵衛どの、いよく小まんと、
たがひに心底うち明けて、
フウあの心底を、
イ、エ、さうぢやない、

トよろうとするを、仁左衛門引廻し、最前の三味せんを、宗十郎へつきつ
け、

一宗 一仁

イヤ、うち明たく、證據はこれ、○起請がはりの此三味
せん、ト宗十郎へ見せる、宗十郎見て、
ム、こりや最前の五大力、○ヤ、三五大切、ム、すり

一仁 一菊 一菊一仁一宗一仁

や五大力を書直して、
此三五大切、ト思入

ヤ、
サア此ごとく小万が身共へ、菊之丞立かよつて、
イ、エ、これはなア、

トいはうとする、仁左衛門菊之丞に二かいを見るといふこなし、菊之丞は
三津五郎、東蔵を見て譯をいはず、いひ度こなしにて、

サア、此三味せん、○エ、どうよくぢやわいなア、

トきせるにて、三味せんを打やぶる、
エ、忝ない、

ト其かばを引やぶり、いたいて懐中する、菊之丞心づきはつとこなし、
宗十郎もこなしあつて、

五六カ

一宗

ム、三味せんは藝者の魂、○ちかひを立し五大力に、筆をくはへて三五大切、あまつさへ打破つたは、

トちよつと脇差へ手をかけ、あたりを見て、ちやつと思入あつて、せかぬこなし、

フムフ……○何とせう、せうことがない、身共もふつと、思ひ切つた、

もうやけど、トとびかゝらうとする、宗十郎是をとめて、

ハテもう何にもいふな、○彌助、はき物を見てくれ、

イエ〜〜それでは、トこなしあるを、仁左衛門とめて、

アレ、源五兵衛も思ひ切つたと、〜、ト二階へかけていふ、

一菊一仁左衛門一菊一宗一龍

エ、ト泣く、

一龍

仁左衛門 是から誰はどからず、小方を身共が女房にしても、黠のちてはあるまい、〜、

イヤある、此彌助がある、

ト又かゝらうとする、宗十郎じつと留めて、

ハテもうよいてや、

それでもあんまりでムリ升る、

里女に戀なし、財を以て戀とする、○遊里の女は、みなあ

くしたものぢやわえ、

デモ見す〜、ト立を、宗十郎又一寸留て、

ハテ、何にもいふな、人ではないわえ、

ト唄になり、宗十郎思入有て龍藏を留めながら、こなしあつて兩人むかふ

五大力

へ道入る、三津五郎二階よりおりて来て、

三津 これく小万、忝ない、

一菊 イ、エ、わたしやたつた一言、 トむかふを見て思入、

一仁左衛門 モウよいく、心底見えた、

一菊 サア其心底を、〇エ、どうせうぞいなア、

トウろくする、三津五郎は無性に悦び、

一三津 是で源五兵衛が身のをさまり、〇イヤ惣右衛門殿、是へお

いで下されい、 ト下の方の二階より東蔵おり来て、

一東 只今のしぎ、篤と見どいけし上は、源五兵衛は歸國てムら

う、さすれば咎を免し、元の武士、此様に目出たい義はム

らぬ、

一仁左衛門 是々御舎兄、此上は一時も早う惣右衛門殿を御同道にて、

御合點か、

一三津 なる程く、國元へ歸國の用意、惣右衛門どのにも、

一東 しからば旅宿へ、

一三津 お供仕り升う、 トこなしあつて、菊之丞を見て立戻り、

小万、きなくと思ふまい、鬻者に似合はぬ其様な、ア、

愚智な、コレ身共が請合、こちらの身分さへ納れば、最前

もいふとほり、又如何やら共、それをたのしみに必ず、〇

わづらはぬやうにな、〇とはいふもの、一筋に思ひこん

だを、

一仁左衛門 これさ、 ト三津五郎に歸れといふこなし、

五六カ

三津 又近日あひませう、

ト相方になり、三津五郎東藏こなしあつて、門口へ出て花道へ行き、兩人立どまり、

東 まんまと首尾よう、

三津 三五兵衛様のおさしづにて、御家來の土手平どの、

東 差つけぬ大小、お國の役人堤物右衛門とは、ヤレく究屈なめにあうた、あんばいよくいつた上は、元の土手平、

ト羽織袴を取り奴になる、三津五郎も上着をとり、若等のすがたになる、此内に仁左衛門は、泣伏して居る菊之丞が方を見いく門口へ出て、二人を見て、早う行けといふこなし、

三津 是みな若旦那源五兵衛さまが、大切ゆゑ、ト仁左衛門を見て、

御朋輩のよしみとて、だんくの、

仁左衛門 ハテ、トしかた、三津五郎思入あつて、

東 お禮はゆるりと、

三津 コレサハ右衛門どの、

三津 おさらばでムり升る、

ト三津五郎こなしあつて、衣裳をかへ、ついとあげまくへ這入る、仁左衛門東藏をまねき、本舞臺にてさしやく、東藏心得、衣類大小をかへ、ぬきあしにて、菊之丞に見えぬやうに、下の二階へ上る、此内仁左衛門、菊之丞に東藏が見えぬやうに、立はだかつて居る、始終よろしく相方にて、仁左衛門思入あつて、

仁左衛門 モツ、餘程夜がふけたさうな、駕籠でも歸らう、

トいうても、菊之丞やはり癩のおこりしこなしにて、かまはずなきふして居る、仁左衛門思入あつて、

ア、癩か、くすりをやらう、

五六

仁左衛門 手をたたく、おくより万代茶を持て来る、

万代 茶を一つたも、

仁左衛門 さう思うて、くんでまゐりましたわいなア、

一 爰な機轉物め、

ト茶わんを取てそばへおき、
コレ小万薬をやらう、ソレ茶も爰にある、

ト菊之丞いやがり、いろくこなしある所へ、向より勘左衛門、急ぎ出て
来て仁左衛門を見て、

勘左衛門 三五兵衛どの、く、

トいへ共きこえぬこなし、勘左衛門こなし有て、

これさ三五兵衛どの、生根をおつけ被成、何と心得てお出
なさる、かの大切なる義につき、先程より大野屋方に相待

仁左衛門 居るに、どう致した儀でムる、

一 勘 大切な義とは、何の義でムる、

一 勘 是はしたり、彼の呼子、

仁左衛門 呼子とは、たれを呼升る、

勘 トうかく菊之丞が方へ心引されるこなし、

一 勘 ハテ、大切な龍虎の呼子、ト是にてびつくりして、

仁左衛門 ハテようムる、ト菊之丞が方へ思入、菊之丞も呼子と聞て思入、

一 勘 伴右、今少し御用捨にあづかりたい、

一 勘 是サ、それでは相すみませぬ、サアくお出被成、

ト手をとつて、むりやりに上の二階へ連て上る、菊之丞二人が二かいへ上
りたるを見て、こなしあつて門口へかけ出さうとする所へ、奥より市松つ
かくと出て、門口へ立ふさがり、

五六カ

一菊一市

小万さん何所へゆかしやんす、

おみきさん、どうぞ大和町へちよつとやつて下さんせいな

ア、

一市

イエ〜お前をどつこへも出すなど、最前のお客や三五兵衛さんのいひつけ、それに大和町へゆかしやんしてはわる

からうぞえ、

一市一菊

それでもあはねば、どうも気がすまぬわいなア、

氣のすまぬは、わたしもおなじ事、さいぜんのやうす、源

五兵衛さんが、はら立てんせうが、おまへの身の上、知

らさぬ様に歸し申さうと思つてから、こちの人と言合せ、

○大事のお客を何のそまつに思ひ升う、さつきのようにい

一菊

うたのも、源五兵衛さんのお爲を思つての事、おまへがあはしやんしたら、よいやうにたのんだぞえ、それはさうと小万さん、おまへは又、源五兵衛さんとほんまに切れる心かいなア、

一市

何んのマア、ちつと譯があつての事、それはマアゆるりと、コレもうしをがみ升る、ちよつとやつて、下さんせいなア、それでも今夜はよしにして、氣のすまぬ事が有なら、さい

はひ〜、ト硯箱を取て来て、

爰に硯がある、其やうすをかいてやらしやんせい、お吉に

しつかりと、もたせてやるわいなア、
そんなら文をか〜うかいなア、

五大力

一市 一菊 一市 一菊 一市

夜の更けぬ内に早うかゝんせいなア、
文よりは、ぢきにあうて、

ハテそれではわるいわいなア、

エ、しん氣な、よう文をかく事ではあるぞ、

トすゞりを引よせ、こなし、

一市

ドレわたしや、お吉を爰へよこさうか、○コレ小方さん、
其やうにくよくくと、○しかし苦はたのしみの元ぢやなア、

トこなしあつて這入る、相方に成り、菊之丞文を書きながら、うれひのこ
なしあつて、

一菊

源五兵衛さん、さぞおはらが立たでムんせう、これまでつ
ひに一度、あひそづかしはおるか、ちよつと御機嫌をそこ

なうた事もなし、ことに今御不自由のお身のおこりは皆わ
たしゆゑ、それ共いはず大事の事まで打あけていうて聞し
て下さんした御しんの程、それに引かへ、三味せんのうちか
ひにかいた五大力まで、思はずやぶつた事ぢやもの、おは
らがたゝいて何とせう、又お國の兄御さんの、おたのみを
つけこんで、三五兵衛づらが、何のかのと、おはらの立事
ばつかり、其いひ譯は、大事に思ふおまへのお命にかゝは
るとあるゆゑ、わざとつれなう心に思はぬ事共も、皆義理
にせまつて、此身一つに引うけて、しよせんながらへる心
はムんせぬ、せめてあなたへのいひ譯には、三五兵衛をだ
ましてなりと、大切なせんぎのつなをと、いろくくと尋ね

五大力

ても、いぢづよい三五兵衛、しかし今伴右衛門がいうたは、
たしか、に龍虎の呼子、どうぞ此事を、○サア何をいうても、
さいぜんのしぎ、委細の事は此ふみに、○これを見て、か
んにんして下さんせいなア、

となきおとす、しどう相方、是より時の鐘になり、方々にて、柏子木わり
竹をならす、向ふより宗十郎、ほ、かむりして、思案しながら出て来る、
おくびやう口よれ浦右衛門、ばん太郎の形りにて、柏子木をうつて出て、花
道へかゝる、宗十郎とすれちがひて通る、宗十郎ふりかへり、浦右衛門が首
すぢを取てきやく、浦右衛門びつくりして、ふるへながちうなづく、宗十
郎柏子木を取て打ながら往來をうかゞひ居る、浦右衛門門口へ來て戸をた
しき、

浦右衛門
一 もうしちよつとおたのみ申升るく、

トはげしくたくく、菊之丞はかまはず文をかいて居る、

内方に、さゝの三五兵衛さまがムり升るかな、

東藏

何だ、お旦那をたづねるは、何の用だ、

一浦

お屋敷から使に参り升た、一寸爰を明て下さいませ、

トいひすて、いつさんに向ふへかけて這入る、宗十郎は身しらしへして、
うかゞひ居る、

一東
今時分お屋敷からお使とは何の用だ、

ト戸を明けて、

サア、はひらつしや、

トいへ共挨拶なきゆゑ、合點のゆかぬこなしにて、門口へ出さうにする、
宗十郎東藏がむなぐらを取る、

ヤア源五兵衛か、

トびつくりする、宗十郎ぬき打にト太刀切る、東藏しかけにて胴切にな

五六カ

一菊

ヤア源五兵衛さんかいなア、

る、菊之丞是を見て、

ト寄るを一ト太刀切る、これに構はず、菊之丞書置を持つてゐながら、宗十郎がむなぐらへ取りつきながらさしころされ、手を放さぬゆゑ、其刀にて手を切る、かきおきを持た腕先、宗十郎がむな元へついて居るしかけ、此物音にて、二階には仁左衛門、勘左衛門、下を見て燭臺を吹けし、いろくおかしみ、勘左衛門はそつと下へおり、うかいうてゐる、宗十郎は拔身にて、二かいへ上るゆゑ、勘左衛門後ろより、こはぐうかがひよつて、

一勘左衛門

源五兵衛まで、

トかゝる、ふり返て一ト太刀切る、勘左衛門は門の外へにげ出し、
そんなぢやないわえ、

トふり返らうとする、是もしかけにて大げさに成り、ばつたりたふれる、片腕おちる、宗十郎是より二かいへ上る、是にて仁左衛門いろく有て、長持の上へ上り、うろたへて向ふへおちる、宗十郎さぐり寄て、長持へあ

一龍藏

誰だ、

とんだ所に寝て居るな、がうぎに酔つたな、

トいひながら、提灯にて勘左衛門が死跡を見て、びつくりして逃ようとして、あふむけにたふれ、うろたへ内へにけ込、菊之丞が死がいを見て、ハッというて、又表へ逃ようとして、門口にて東藏が胴切につまづき、べつたり腰のたぬ思入、奥より宗十郎出て、こなし有て菊之丞が首を切り前たれに包み腰へ結び付る、龍藏は是を見て、逃げようとして腰の立ぬ思入、宗十郎表へ出ようとして、こなしあつて、長持の蓋に向ふへはれた思入にて、長持の向ふの心元なきこなしにて、行燈を下げ、ぬき身を持って二

五六力

一龍一宗一龍一宗

彌助、

階へ上りにかゝる、是にて仁左衛門びつくりして、うろくして居る、宗十郎行燈を階子の中段にて取落し、まつ闇になつたこなし、宗十郎さぐりもつて、二階へ上る、仁左衛門うるたへ、長持の中へはひる、宗十郎は長持の蓋を手前へはれて、長持のむかふを刀にて突て見て、向ふにも居ぬ故、是非なく下へおりの、此内龍藏いく度も逸やうとすれど、腰の立ぬ思入にて、門口に取つき、内をうかがうて居る、宗十郎門口へ来る故、表よりびつしやり戸をしめる、宗十郎かまはず、刀の先にて戸を明る、龍藏門口にべつたりと手をつき、ふるへて居る、宗十郎見て、

三五兵衛は、

ワ、私わたくしは、何なんにも存ぞん升じまぬ、

トふるへ聲にていふ、宗十郎は口をしきおもひ入あつて、龍藏に我がはいた下駄をなほせと仕方をする、龍藏心得、ふるへく下駄をなほしてやる、

へ、トふるへる、

又傘も、手を出すゆゑ取てわたす、此うち始終雨車の音あり、

彌助、

へエ、トはひ出る、宗十郎小づかをぬいて、

先刻借請た金子のかはり、祐宗すけむねの高たかぼり、五兩七兩にはな

らう程ほどに、取とてあさやれ、ト龍藏にわたす、

ア、ありがたうムり升る、

ト時の鐘になり、宗十郎語をうたひながら向ふへ這入る、龍藏後を見送り、ほつと思入して、内へ這入る、此内仁左衛門二かいよりおりに来て、舞臺を這廻て、兩人顔を見合せ、急に物のいはれぬこなしにて、仁左衛門側に有合せたる銚子の酒をぐつと一口のみ、

一龍一仁左衛門彌助、

三五兵衛さま、今源いま五兵衛が、ト切る真似をする、

五大力

一宗一龍一宗

一龍

一龍

仁左衛門 かはいや小万を初め伴右衛門、家來土手平までばらしをつ

た、

龍 此上は、人ごろしの科人源五兵衛は解死人、

仁左衛門 いかにも彼奴をしまひつけて、身共が所持する龍虎の呼子

を賣拂ひ、

龍 私がお供で上方へ、

仁左衛門 成程此所にはゐられぬ、彌助そちらは土手平がはり、

龍 やうすを聞ば盗物、其はけ口も私のはたらきで、

仁左衛門 萬事になれた其方、オ、たのもしい、

ト此内より、廣次つかくと出て来て、門口にてうかどうて居る、此時

廣 扱は三五兵衛、そちらは呼子の盜賊、

仁左衛門 トつかくと這入て、仁左衛門にかゝる、

龍 出石宅左衛門、

廣 すりや最前からのやうすを、

龍 源五兵衛が身のうへ心許なく此所へ来て、思はず兩人が其

いひ合せ、

仁左衛門 それ聞れたら身共が大事、 トふり切る、

龍 彌助がはたらき、

ト立かゝる、廣次突まはす、仁左衛門切てかゝる、是より三人立廻り、見
えに成て道具替る、

大和町貸座敷の場 木場泥仕合の場

本舞臺初の大和町の貸座敷の道具に成、右のふたいに行燈ともしある、たばこ盆も側になほし置、行燈に油火にしてあり、しのび三重にて道具とま

る、
トむかふより宗十郎、前幕のなりにて傘をさし出て来て、門口を明け、ずつと這入る、こなしあつて袴についた手をときはなし、書置をとり、すんぐくに引きき、大小ぬき、上着は血のついたを、こなしにて替替る、此時最前の書出しもおちる、是もすんぐくに引きき、書置と一つにねじり、腕も一所に火燵の蒲團の下へ打込、元の通りにして、菊之丞が首を火燵の上へ置、此時菊之丞本首を出す、宗十郎あんどうの火をかき立、とうしんを澤山に入れ、菊之丞が首を見ながら、ムウと首をにらみ付て、たばこをのんで居る、ばたくにて向より三津五郎、いぜんの形にてはしり出て、三

三津五郎
一 三津五郎、うれしや、まだ内にムリ升たな、

三津
一 源五兵衛さま、トつかくとそばへきて、

もうし是、さ、これをはかつしやりませ、トわらぢを出し、
此かさて顔をかくして、サア〜はやう〜、

ト懐中より金の入し打返しを出して、
少々路銀も、爰に用意してムる、サア〜夜の明けぬうち、
ひとまづ爰をちやつと〜、
ト引立る、宗十郎はおちついて居て、

五六刀

宗十郎 ばかめ、何をするのぢや、
三津 何をするとは、ちちつぎすぎ升る、さう斯ういふ間もめし

とりに、○コレ早う立退く用意をさつしやいませ〜、も
うし仲町の騒動、上を下へとさわいでをり升るぞ、○ぢや
によつて、おまへさまを、

一宗 よいわ、うはさがあればかくすにおよばぬ、

トまへだれより、ふきがへの首を出し、

三津 入右衛門、コレ是を見ろ、ト三津五郎首を見て、

一宗 不便や小方を、南無あみだぶつ〜、

一三津 何とにつくい女らうてはないか、

一三津 エ、たん氣な事をさつしやい升たなア、

一宗 八右衛門、親人へ忠義をわすれなよ、ト刀をさし、行かうとする、

一三津 もうし若旦那、何所へムり升る、

一宗十郎 した事だ、いひかはしても小方は賣女、身共は浪人、め
らうめをぶちはなした故、名のつて出るわえ、

ト行かうとするを、立まばりにてむりやりに引とめ、

一三津 イヤ〜そりやならぬ〜、

一宗 なぜとめる、

一三津 コレ、さうさすまいと、此わらち三度笠、路銀も持て参つ
たは、夜の中に立のかさうと、うるたへまなこでかけつけた
のぢやわいのう、是、千島の家風と自慢した御家のお名を
下し、親御のちじよくを思はぬ心か、○エ、なさけない若

五六カ

旦那、此八右衛門はをさない時より御奉公申、親仁どのも
 る共に、ふだいの家來ぢやぞや、此度此江戸へ下つたも、
 こなたの身の上、いちぶしじふお國へ相しれ、親旦那源次
 兵衛様の御立ぶく、すてにお手打にもと思召てゐるを、此
 八右衛門めが段々お願ひ申て、おきづかひ被成ますな、下
 郎めが江戸表へ下り、若旦那源五兵衛様に御いけん申て、
 お心を改めさせ、あらひあげて元の武士にして、歸國仕
 るでゝり升ると申上たれば、親旦那にも御りつ腹のお顔も
 かはつてにつこりと、八右衛門出かした、さすがは譜代の其
 方、倅めに篤と意見をくはへ、心をあらためさせ連歸てく
 れ、身共とても年寄て、今役にたつべき倅めを、まんざら

宗十郎

手打にしたい事はないと、目のうちうるんでおつしやつた
 を、知らぬこなたは名のつて出て、あまつさへいゝかはし
 た女を手につかけ、其とが若旦那は、鈴が森でごくもんに
 かつつてゐると、お國へかへつて親旦那に、コレ申上られ
 さうなもの、おもうて、ゐさつしやりまするか、源五兵
 衛さま、イヤ若旦那、
 一ム、成程、やうす御存なければ、國元の親人初め、一家中
 そち達迄、身共がたゞ小方が色かにまようて、身持はうら
 つと思ふもことわり、又斯くぶちはなしたも、女が心がか
 はつた腹立と存ずるであらうが、中々さう云ふ源五兵衛で
 はない、是にはいふにはれぬ、お家の爲になる深い思案が

五六方

一三津 有ての事ぢやてさ、
何お家のお爲になるふかい思案とは、

トばた／＼にて、むかふより徳次、しりをからけて、はち巻にて、走り出
て来て内へかけ込、かたいきになつて、

源五兵衛どの／＼、

一宗一徳 一宗一徳 一徳 一宗一徳 一宗一徳 一徳
ヤ家主の六右衛門どの、さぞおどろさでムらう、

是そこ所ぢやアない、仲町の様子知らずかいの／＼、

氣遣ひめさるな、家主のお手前に、難義はかけ申さぬ、

ト立おがるを、三津とめる、徳次、なしあつて、

是源五兵衛どの、こなた故に此家主は、牢櫃へ這入て、首
を切れても、おりや大事ない、マ、それよりは大事がある、

一三津 一宗一三津 一宗一三津

おれが茲へきたは、仲町の騒動、寝耳にびくつり、直にか
け出して往た所が、思ひがけない昨日來たおさむらひ、た
しか宅左衛門様とやらが、三五兵衛といふ侍、まはしの彌
助をとらへて、よぶことやらの詮議と、つかみあひ最中、
此様子を源五兵衛に知らせたいと、あせつてムるを、聞と
其ま、かけ出して來升た、

ヤア／＼／＼スリヤ宅左衛門が、人でなしの三五兵衛を、

もうし／＼若旦那、誠ある三五兵衛様を人でなしとは、

われは様子をぞんぜぬわえ、

イヤ／＼三五兵衛様は、それは／＼御しんせつな、お國元
へこな様のお身の上、お知らせ下されし故、親旦那の仰に

五六カ

て、拙者は此江戸表へ下ると其儘、三五兵衛様のお目にか
 かり、何かのおはなし申上たれば、即ちあなたのお差圖で、
 おまへ様と小万が中、百万だらの異見でも、中々聞かれ
 る事ではない、まづ源五兵衛にあはぬ内に、小万にあうて、
 かうくして縁を切らすが近道と、お國の上布、たばこま
 で土産にやれと、お心をつけられ、小万さへ思ひさらすれ
 ば、しぜんと遠のくこなたのおためと、三五兵衛様と相談
 のうへ、しめし合せて、御家來の土手平を、お國の役人堤
 物右衛門となのらせて、この八右衛門めがこなたの、しん
 じつの兄といつはり、小万にあふて段々と頼み、いやと
 いふのを、むりやりに往生づくめに、縁を切らしたのぢや

一宗 一徳 一宗 一三 一徳 一宗

わいのう、
 な、何といふ、すりや三五兵衛と相談にて、
 源五兵衛様と小万が中をさらした、

ム、サ、皆三五兵衛様のお差圖、
 ム、どうやらそれでは、○まてく、六右衛門殿さわが
 つしやるな、
 イヤわしは、何にもさわぎやしませぬ、

ト宗十郎こなし有て、火燧ぶとんを引のけ、最前破つた書置を取出し、し
 わなのして繼目をあはせる、徳次も是を手傳ひ、三津五郎は、合點のゆか
 ぬおもひ入

申譯ながら、かき残し参らせ候、ふとしたえにしにて、云

五六カ

一徳

かはし、二世のちかひをたのしみ参らせ候、そのかひもな
く、思ひがけなくお國の兄御様、お役人様、御同道にて、
おこしなされ候て、ト徳次又ひきさいたのを繼合せ見て、

金三分、小万様十三日、晝仕舞ぶん、一兩二分、千太郎二
つ、品太夫三つ〇エ、こりや書出した、

ト引のけ、宗十郎徳次すてせりふにて、其次をひきあはせ、

一宗

いろく〜と事をわけて、兄御様のお頼故、縁を切ねばなら
ぬしぎ、それ故心にもはぬあいそづかし、さぞ御立腹と
ぞんじ参らせ候、そこへつけ込三五兵衛づらが、身を任せ
し躰に思はせ候にくさ、
なんだ、にくさかく、ト又あとをたづね、

一徳

一分二朱、うなぎのかば焼代、エ、

ト引のけ、すてせりふにて、あれ是さがし、

これだく、〇むりに思ひ切すたくみに御座候、殊にまた、
トつぎをさがして、

一宗

殊に又、たのみにおもふまはしの彌助づらも、三五兵衛と
なれあひにて、おため顔にて心のそこは、御身のあたとぞ
んじ候、トつぎをとつて、

又々大事のおたのみの事、

一徳

トよむた、宗十郎こなしにて、徳次よりひとつとり、

一宗

お頼の龍虎の呼子とやらは、たしかに三五兵衛が所持致し
しやうす、伴右衛門が立合にて、一寸やうすを承り候〇す

五六カ

一徳

一宗

りや呼子よびこは三五兵衛が、トおもひ入、徳次とめて、

マア、後あとを見さつしやい、是々これこれ、○此事このことを聞出きださう

と心を盡こころつし候ても、いぢづよき三五兵衛故ゆゑ、まことはあか

さず、いろくなんぎに思おもひ候所に、右みぎの様子やうすを承うけり、嬉うれ

敷しく早々さうさう御ごしらせ申上候、ト又つぎをとり、

金四兩二分きんしりやうふぶ慥たしかに受取申候、ト宗十郎又つぎをとり、

もはや最前さいぜんも二階にかいにて、いろく手てごめに致いたし候得共、と

んとく、此身このみはけがし申さず候、かならずく、死しんだ

後のちにても、そればかりは、御ごうたがひ下くださるまじく候、

ト此内宗十郎、徳次、思ひ入あつてよむ、三津五郎一々いっさきく、くと後悔こうかいのこなしあつて、

一三津

一徳

一宗

一三津

ヤア、くく、そんなら其書置そのかきおき、小方こなたが心しんていは、

トいろくこなしあつて、

おまへ様さまをだましたも、三五兵衛をまことある侍さむらいぢやと

思おもうたは、○コレ下司げすの智恵ちゑ、若旦那わかたんなあやまつた、

ト宗十郎、三津五郎が領髪を取て引つけ、

エ、あのれはなア、トこなしあつて、

ト菊之丞が首を見ておも入、

エ、これ、三五兵衛めはにくいやつてゐるわえ、

ト口をしき思入、三津五郎思入有て、

さうぢや、ト腹を切らうとする、徳次とめて、

五六カ

一徳一三 一三 一徳
コレ八右衛門殿、こなたはなんて死ぬのだ、
イヤサ、小方殿を旦那の手にかけさせたは、此八右衛門

三五兵衛をたのんだばかり、それぢやによつて、

ト又死なうとするを、むりにとめて、

一徳
コレ、こなたが今腹切つたら、殺された小方がよみがへり

升るか、

一三 一徳 一三
サそれは、

殊に大事の源五兵衛様に、死んで忠義が立升るか、

オ、たち升る、

そりや又どうして、

一三 一徳 一三 一徳 一三
サア、たくみのある三五兵衛ともしらず、拙者が頼だ此身

一徳一三 一徳一三 一徳一三

のあやまり、まことある小方殿の心底なれば、おもては藝
者遊女、すりや解死人は此八右衛門がたつて、御旦那には
大切なせんぎ、こりや是、お家にかゝはる一大事、ツイか
るはずみな事ではない、寶がお手に入ねば、千島の家國は
退轉し升わいのう、
成程、さう聞けば尤ぢや、
ぢやによつて此八右衛門、
忠義に命をなげ出して、
此身は解死人、

あつばれ侍、花は三吉野、さかなはかつをぢやなア、

トこなしある、むかふより龍藏を廣次追て出る、花道にてちよつと立廻り

五大カ

一龍一宗一廣一三津一廣

有て、舞臺へ追て来る、

なむさん源五兵衛、ト引かへしてにげる、廣次立ふさがる、

ヤア彌助めか、ト引まはす内、廣次は内へ這入、

源五兵衛殿、御油斷なざるな、そいつも三五兵衛が同類、

其様子は小方が書置で承知致した、よううせたなア、

すりや宅左衛門様には、

仲町の騒動心ならず駆付しに、おもはず三五兵衛とさやつ

が云合せ、呼子の有所も逐一に、

トにげようとするを、廣次引まはす、立廻りの内、廣次門の戸をびつしや

りめる、龍藏を四人して取巻、

一廣

源五兵衛殿、呼子のせんぎ、さやつにとつくりと、

一宗一徳

一龍一四一龍一四人

捕手が来ちやアわるい、早くぬかせ、

三五兵衛がありか、サア何所ぢや、

トにぎりこぶしにて、あたまをほりまはす、

サア早うぬかせ、トくらはせる、龍藏いたがるこなし色々有て、

アいた、、、申しますく、

サアぬかせく、

ハイ、高で斯うでムり升る、三五兵衛様が私を頼んで、小

万をくどきおとして源五兵衛、ト宗十郎が顔を見て、

さんを江戸の地におかぬやうにもくろみ、それはお國でぬ

すんだ龍虎の呼子のばけ口がない故、兎角じやまになる源

五兵衛さん、私は何にも存じ升せぬが、三五兵衛さんがた

五六力

一宗一龍 一廣

のんでぢやによつて、おもてむきはせわやく顔で、内證は三五兵衛様と一つ腹、呼子を私がせわしてうりはらひ、其金で上方と心ざし、江戸を立のく相談の所へ、此宅左衛門さんが見えて、ちりくばらく、モウ是で何にもいふ事は、ト立上りにげようとする廣次引すふ、源五兵衛が小方を手にかけたをさいはひ、人殺しの訴人するどぬかしたな、そんな事いうたかいなア、トいふ又ぶちのめす、イヤ、それよりはかんじんの呼子は、三五兵衛が所持して居るか、

三津徳 一四入 一龍 一宗 一廣 一宗 一三津 一徳

シテ三五兵衛は何處に、サアぬかせ、申升るく、三五兵衛さんは、えびすの宮か木場のあたりに、私が行をまつてゐる筈でムリ升る、それ聞たらモウよい、なんでも三五兵衛をひとつとらへ、人切なる呼子の詮議、ト身ごしらへする、それが肝要、短氣は御無用、立かへるまでは、八右衛門其方も、いづれ若旦那の吉左右次第、小まんが此首、とり片付は家主が役、

五太刀

三津 宗 龍 宗 廣 三津 德 宗 三人

ト徳次首を取上る、此うち龍藏そろく逃ようとする、

せんぎの目代、トはなしつきやる、

いかにも、ト引窓の細引を引切り、龍藏をしげる、

こりやどうなされ升るく、

せんぎのおとりに、さずはつけぬ、

夜あけぬ内に、

寶の盜賊、

小まんがかたき、

仇と、

なさけ、

ト徳次首を見せる、宗十郎ほろりと思入、龍藏むかふつかく逃る、

一宗

宗十郎細引をひかへ、

南無あみだぶつ、〇うせう、

ト龍藏を引立てむかふへ這入る、本舞臺の三人心いきよろしくあつて幕、

引返す、本舞臺正面黒幕、一面木場にて、丸太矢來、よき所に大木の柳身

木、つり枝見事に、舞臺先き泥船、時の鐘、蛙の聲、雨車にて幕あく、

ト上の方より、仁左衛門しりながら、はだしにて傘をすぼめてさしてお

りて來る、

仁左衛門

こりや少し雨も小降になつたさうな、思ひがけない所で、

宅左衛門めにでつくはして、とんだめにあつた、時に彌助

は何所へふけたしらん、

ト花道の方へうろくかゝる、むかふより龍藏、しぼられた形にて、走つ

五六力

彌助か、

て来て仁左衛門に行あひ、

一龍 もうし三五兵衛さん、爰には居られませぬ、早くふけた、

一仁左衛門 呸けた、

一サアそれに付ても、彌助もぬしに逢ひたかつた、

トいふ内、あげ幕の内にて細引をひく、龍藏其形にて後ずさりに咄をしな
がら、切幕の内へ引こまれる、仁左衛門は是を知らず、

此上は、かの呼子を一時も早くばらして、

ト云へども龍藏ぬゆゑ、方々見まはし、

彌助めは、たつた今まで、

ト方々見廻し切幕の方へ行く所へ、宗十郎つかく、と出て、むかふへ立ふ
さがる、龍藏は宗十郎にひかれながら、跡よりついて出る、

一仁左衛門

一源五兵衛か、

一宗十郎

一ハテよい所で、

一仁左衛門

一わるとい所で、

一二人

一あつたなア、ト是より舞臺へおしもどす、

一仁左衛門

一源五兵衛、うぬは小万が解死人だぞ、

一宗

一イヤ解死人より、そちに尋ねるしさいがある、

一仁左衛門

一何を、トおどろくを留ながら、三人よろしくあつて、

一龍

一モシ此細を、ト仁左衛門が側へ行くを、宗十郎引まはして、

一宗

一コリヤ彌助、身が宅でいつた通り、今一應ぬかせ、

一仁左衛門

一サアそれは、

一ぬかさにはア、うぬ斯うか、トしめにかゝる、

五大カ

一龍 サア云ふわいな、最前もいふ通り、わしが頼まれた、

トいはうとする、

一仁左衛門

一宗十郎

ヤイ、彌助、役にもたぬ事をぬかすな、

一イ、ヤ役に立事だ、龍虎の呼子、三五兵衛がお國で盗み所持すれば、今宵の騒動尻こそばゆく、そちを頼み、呼子を賣拂ひ、その金を持って、二人が上方へのぼると云うたでな
いか、

一龍

一仁左衛門

サア、さう云うたやうにもあり、又いはぬやうにもあり、コリヤ源五兵衛、手にもたらぬ彌助をべ上る事はない、身におぼえもない事をいはして、身共をどうぞしようとおもふのか、

一宗

一仁左衛門

イヤどうもせぬ、龍虎の呼子を取かへすのだ、ハテしやらくさい、呼子をぬすんだ覺はない、殊におのれは人ごろしの科人、小万がかたき、

トぬきうちにかける、宗十郎有合ふ傘にてうけ留る、

一宗

大切な呼子のせんぎ、證據をもつて出さすが式法、それに無法の三五兵衛、モウ此うへは武士の禮義をとりあいてあらそへば、

ト傘をはれる、切まはす、きつき龍藏が繩を切てやる、仁左衛門呼子をおとす、三人宜敷見えあつて、

一宗

一兩人

扱こそたづぬる龍虎の呼子、それを、

ト取にかゝる、宗十郎立廻り、三人よろしく見えになり、あつらへのなり

五六カ

袖珍名著文庫

全一册定價上一冊金廿八錢並製一册廿錢郵稅各六錢

校訂編輯擔任

櫻庭露村先生
幸田露伴先生
關根正直先生
上田萬年先生
藤岡太郎先生
尾崎紅葉先生

五十音順

次 目

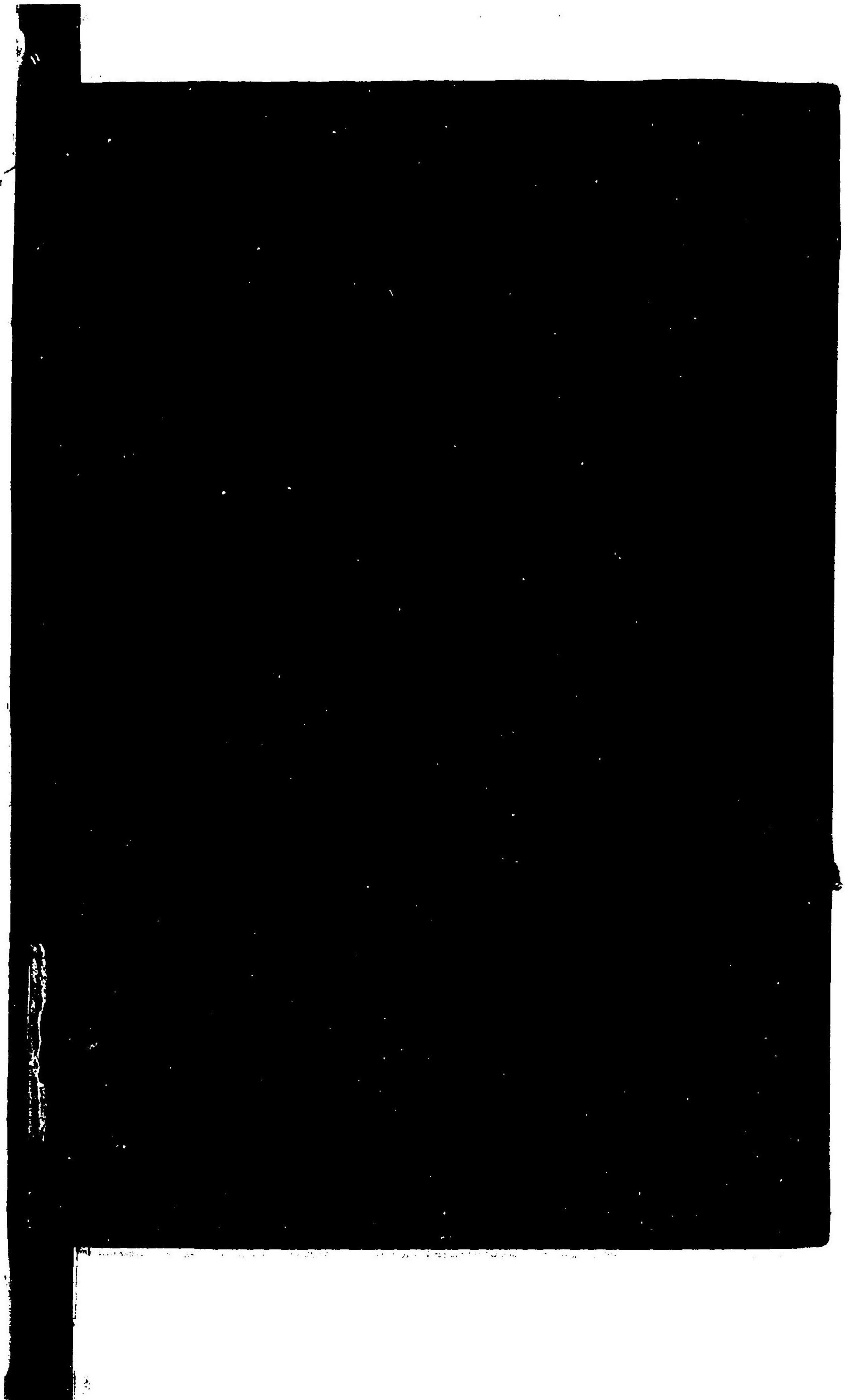
蝶夢芭蕉翁繪詞傳	幸田露村先生校訂	三月發行
近松淨瑠璃三種	幸田露伴先生校訂	四月發行
秋成雨月物語	芳賀矢一先生校訂	五月發行
曲山人娘節用	尾崎紅葉先生校訂	六月發行
今昔物語選	藤岡太郎先生校訂	七月發行
近江縣物語	關根正直先生校訂	七月發行
狂言二十番	芳賀矢一先生校訂	七月發行
山家集	幸田露村先生校訂	八月發行
風流志道軒傳及假名文選	幸田露村先生校訂	八月發行
春花五大	宮崎三郎先生校訂	八月發行
俳諧水滸傳	上田萬年先生校訂	九月發行
よものあか	上田萬年先生校訂	九月發行

(以下毎月二冊宛發行)

袖珍名著文庫は、我が邦一般の家庭に、健全にして多趣味なる文學的
 讀本を供給し、娯樂に由つて讀書の嗜好を養ひ、人生の慰安を興へ、
 進んで現存の没趣味なる社會の風潮を一變せんことを期す。
 袖珍名著文庫は、娯樂に由つて讀書の嗜好を養ひ、人生の慰安を興へ、
 進んで現存の没趣味なる社會の風潮を一變せんことを期す。
 袖珍名著文庫は、娯樂に由つて讀書の嗜好を養ひ、人生の慰安を興へ、
 進んで現存の没趣味なる社會の風潮を一變せんことを期す。

911

112





088726-000-8

94-112

春花五大方

並木 五瓶/著

M36

DBJ-0385

